小児科医は天職です。

中山小児科医院院長　中山康子

1988年、小平市鈴木町1丁目の住宅街の中に小さな小児科医院が誕生した。その開院前に取材に伺ったことがある。院長は中山康子さん(59)、立川相互病院の小児科医として勤務後、独立開業。当時はまだ30代の終わりで2男1女の子育て真最中。初めての土地での開院は不安と喜びとが交錯するようだったという。

あれから20年、当初は「1日に患者さんを30人診ることができれば」と望んでいたところ、ピーク時には1日に130人もの赤ちゃんや幼児が来院したような小児科に発展した。そのため隣地を購入し、5年前に増築。広い駐車場も完備した。現在は電話予約制で1日に70～80人を診ている。

「自分が満足できる診療をしたいから、一人を診る時間が長くなるんです」と言うとおり、その丁寧な診察には定評がある。中耳炎が疑われる子には先生自身がたまった耳垢を取ってやる。それが1日に何回も重なることもある。「ほどほどができない、何に対しても徹底するタイプ」と自己分析する。

夢あふれる待合室
中山小児科医院　小平市鈴木町 1-30-20
TEL　042（322）1231

20年の間には子どもたちを取り巻く環境も変化した。会社人間が減り、積極的に育児参加する父親が増えた。中には4人の子持ちで妻と交代で、1年間の育児休暇を取るおとうさんもいる。離婚が増えたのは心痛むことだ。身の上相談され、「本当にそれでいいの?」と釘をさしたこともあった。そんな母親の親の年齢になったせいか、近頃は子ども同様、若いお母さんたちも可愛いと思う。

子どもに発熱があっても細菌性の疾患でなければ、抗生物質は使わないので、「様子を見て」と言うが今どきのお母さんには細かく、具体的に指示しなければ伝わらない。そんな経験から、子どもの様子をみても大丈夫な時、救急外来受診が必要な時の事例を細かに記した『こども救急ガイドブック』を小平市医師会小児科医会から発行し、役立つと大変好評だ。最近まで医師会副会長としても多忙を極めていた。

中山さんは診察室で白衣を着たことがない。柔らかな柄のワンピースにエプロンをつけている。子どもが恐がらずに安心感と親しみを持つためだろう。広い待合室の壁には木々や鳥の絵がペイントされ、受付上部にはおばあさんが野原で動物や子どもたちに囲まれ、本を読んでやっている壁いっぱいの絵。「あのおばあさんが私なんです」と笑う。トイレも2ヶ所あり、それぞれ海と気球をテーマに楽しい絵が描かれている。個室の授乳室やオムツ替え室も完備。木の温もりが伝わる子ども用のテーブルやベンチがあるプレイコーナーにはミニカーやブロックがたくさん。隅々にまで院長のコンセプトが行き届いた、親子に優しいメルヘンチックなスペースだ。

3人の子どもたちはそれぞれ歯科医、外科医、医学生（現在）へと巣立っていった。「別に強制した訳ではないのに、皆同じような道に進んで…」長女と次男の中学受験の頃、毎晩子どもたちの勉強をみてやっていたが、途中で急患の電話が入る。仕事と子育て、どちらにも全力投球なので精神的にも肉体的にもキツイ時期だったと振り返る。今は内科医のご主人との二人暮らし。休日のガーデニングが一番の息抜きであり楽しみだ。医院の前は丹精した花や果樹のオープンガーデンになっている。

「根っからの子ども好き。好きなことを続けさせてもらい小児科医は天職だと思っています」という院長を理解しサポートしているのは10人の女性スタッフ。このチームワークが地域の小児医療を支えている。